

ぼくは君がなつかしい

ほろほろ落花生全集

目次

■巻頭詩

きれいな断面

5

■序文

ほろほろと生まれ変わる（高橋文樹）

15

■東大仏文時代

ばるんちよ祭り〔小説〕

24

1998-2003

『田園交響楽』研究〔評論〕

50

■東京でストラグル

Re:現代文〔テスト問題〕

88

2003-2010

Re:現代文解答例〔テスト解答〕

112

ていうかさ〔小説〕

132

対話篇〔小説〕

136

救出〔小説〕

148

だるま落とす〔小説〕

152

クロニック・ペイン（高橋文樹）〔ノンフィクション〕

158

■福井永蛭居

ばるんちよ巡礼記〔詩〕

186

2010-

ふたり〔小説〕

248

ゆすらうめ鉞〔詩〕

254

時計〔小説〕

260

リバレイト〔散文〕

266

ざくろ〔エッセー〕

270

幸福の回収 「小説」
コール・ミー（高橋文樹） 「アンフィクション」

■反出生主義^{アンチ・ナタリズム}

2013

犯人 「小説」
布告 「箴言集」
最後の文学者 「インタビュー」

■つみのない
イノセントほろほろ

1990-1991

90m走 「作文」
地球ファミリー 「作文」
雪とぼく 「作文」
五年生の思い出 「作文」

■付録

書簡ほか
略年譜

■巻末詩

オープンティア

494	474	410	406	404	402	400	360	322	310	286	280
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

序文

ほろほろと生まれ変わる

高橋文樹

文章を読むことは、書き手の魂に触れることだ。あなたがこれまでにまともな読書をしてきたのなら、覚えがあるだろう。単なる気晴らしとも言い切れないような感覚。一度も会ったことのない書き手の心奥に触れたような手応え。そう、あなたはこれから、ほろほろ落花生というざらついた魂の、そして、よりよつてそのすべてに触れようとしているのだ。

ほろほろ落花生は一九七九年生まれ、福井県出身の詩人・作家である。ペンネームの由来は落花生の性質による。その名の通り、落花生は花が地面に落ちると、そこから種子が根を伸ばし、新しい命として生まれ変わる。「落花生」という植物の名にその花が落ちる様を表現する擬態語「ほろほろ」をつけてできあがったものが、この風変わりな筆名だ。

本書が「全集」であるために故人であると思われる読者もいるかもしれない。ほろほろ落花生は存命中で、本書刊行時点では福井県福井市で生活している。詳しくは本書所収の年表に譲るが、東京大学合格を機に福井県から上京し、太宰治や大江健三郎といった錚々たる文学者を輩出した仏文科を卒業した。その後、新日本製鐵に就職したが、遁走して職を辞した。就職氷河期世代として、日本の正規雇用ルートから転落し、さまざまな職を転々としながら東京にしばらく住んだが、やがて福井へと帰った。家庭は持たず、もちろん、こどもはいない。こども部屋おじさんであり、ロスジェネであり、弱者男性であり、反出生主義者である。こうして記号的にまとめると、負のステッカーをベタベタと貼り付けられた裏路地のような人生だ。しかし、作家はその人生の大半を通じて、文章を紡いだ。それは詩や、小説や、散文や、書簡などである。それらのうち、本書には残すべきと判断された文章がすべて収められている。ほろほろ落花生が彼自身として生

きた——生きざるを得なかった——人生のすべてが書かれているという意味において、本書は全集である。

*

本書は基本的に編年体の構成となっている。ほろほろ落花生の人生を四つのフェーズに分け、それぞれ章題をつけた。各作品の書かれた年代はコラムに記してある。

作家に近い人物名・地名などは実際のものと同様な微妙な改変を施してある。ただし、作家・研究者・大学・施設など、公的な事物に関する表記はそのままとした。

東大仏文時代

名だたる文豪を輩出した、文学的アウラの満ちた場における筆耕の時代である。残した作品の数は多くないが、卒論として提出されたアンドレ・ジッド論、および作家の人生に大きな影響を与えた事件を題材にした短編小説「ぼるんちよ祭り」の二篇を収録した。この「ぼるんちよ」という言葉にはなんの意味もないが、作家の人生においてその語感だけで切実な言葉であり続ける。

東京でストラグル

大学卒業後から東京で生活した時代に残した作品をまとめた。文芸団体破滅派における活動では、諧謔に満ちた実験的な作風の掌編を多く残した。破綻の予感に満ちた逆説的な明るさがこの時期の作品に共通して

いる。作品の描かれたコンテクストを理解すると、そのおかしみはいやまずだろう。

福井永蛭居えいちゅきよ

福井に帰ってからの受難時代だ。「永蛭居」とは江戸時代にあつた刑罰で、一生自宅からの外出を禁ずる謹慎刑である。実家暮らしは作家にとって刑罰に等しく、憤怒と怨嗟、そして友情への強い憧憬に満ちた力強い創作が見られる。作家の創作自認は詩人であるが、その本然の発露は大詩編「ばるんちよ巡礼記」に見られる。

反出生主義アンチナタリズム

福井時代後期とも呼ぶべき二〇一〇年代後半に書かれた作品をまとめた。作家は二〇一〇年代初頭からデヴィッド・ベネターらが提唱した反出生主義に傾倒し、思索を先鋭化させていた。本邦でベネターが紹介されるよりも前だったので、その関心は先駆的だったと言えるだろう。「すべての人間はそもそも生まれな一方が良かった」という破滅的な思想に傾倒した作家は、その創作手法を大きく変え、告発文・箴言集・インタビューといった、これまでにない文体を採用している。詩人が形式主義をその武器として選んだ時期と言えるだろう。

また、本書には幼少期の文書や書簡、年表なども付録として収録している。作家のテキストを読む上での補助線となるだろうし、また、それ自体が作品として成立しうる内容だ。対人関係における激しさ。流れ星

のように煌めく詩情。友愛を求める囁き。日常的な文章にも作家の特性を垣間見ることができるといえる。

*

ほろほろ落花生は誰もが知る商業媒体でその作品を発表していた作家ではない。しかし、その事実は作家の才能を裏切らない。編者がほろほろ落花生と出会ったのは、大学時代のことである。このような天才がいるのかと驚いた。それから二十年以上が過ぎた。そのあいだ、誰も作家の本を出さなかった。編者はそのことに改めて驚いた。作家のテキストは、書籍の形でまとめられ、残されるべきものだった。誰もしないなら私しかない——それが本書を編もうと思った契機である。誰かの書いた文章が本にまとめられるまで二十年以上が経った。言ってしまうとその程度のことだ。

編者はほろほろ落花生の人生をよく見てきた人間である。それゆえに、彼からすべての原稿を託されたときに「足りない」と感じた。そこには書かれるべきことが少なくとも二つ足りなかった。私たちはそのことについて議論し、ときには衝突した。作家にとって、それらの体験はあまりにも重く、文章として残すほど客体化できていなかった。結果として、書かれるべき二つの逸話について、編者自身が文章を記すことになった。一つは、氷河期世代として辛酸を舐め、忘れ去られようとしている時代精神としてのほろほろ落花生について。そして、もう一つは青年期の始まりに受けた性被害による深刻な傷を二十年も痛み続けたことについて。それら二篇のノンフィクションが収められたことで、編者は本書に「編集」という職域を超えた関

わりを持つことになった。編者は本書を「私たちの本」と呼びたい気さえする。

*

この本の読者が、考えさせられたり、感動したり、新たな学びを得たとする。本来であればそれは読書の醍醐味だ。だが、編者は本書の読者——それはつまりあなたなのだ——に、それだけで満足してほしくない。できることなら、私はあなたが決定的に変わってしまうことを期待している。あなたの心が壊れ、ほろほろと崩れ落ち、また生まれ変わることを。

二〇二三年十二月

『ぼくは君がなつかしい ほろほろ落花生全集』

著・ほろほろ落花生
編・高橋文樹

発売日：2024年4月5日

ご注文方法は以下のページをご覧ください。

<https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784905197089>